

テーマ：商業販売統計（2006年6月）

発表日：2006年7月28日（水）

～ 4-6月期は低調だが、個人消費の回復トレンドは維持されている ～

第一生命経済研究所 経済調査部
 担当 副主任エコノミスト 新家 義貴
 TEL：03-5221-4528

（要旨）

- 小売業販売額は前年比+0.4%と、ほぼコンセンサス（+0.1%、レンジ▲0.9%～+1.2%）通りの結果。4-6月期でみれば季調済み前期比▲0.3%と小幅減少。また、生鮮食品価格上昇で押し上げられている面もある。4-6月期の消費は天候不順の影響を受けて不冴えだったということが確認できる結果。
- もっとも、足元の商業販売統計は、家計調査と比較すれば悪くない。家計調査はサンプル要因で下振れている可能性がある。4-6月期の個人消費がやや低調だったことは事実だが、実際には家計調査から受ける印象ほどには消費は悪くないと考えられる。
- 雇用・所得環境も順調に回復しており、個人消費を取り巻く環境は良好な状態が続いている。天候不順等の悪影響が剥落すれば、個人消費も再び増加傾向に転じる可能性が高い。

（単位：%）

	商業販売額											コンビニ販売額	
			卸売業		小売業		大型小売店			スーパー		前年比	既存店 前年比
	前年比	前期比	前年比	前期比	前年比	前期比	前年比	既存店 前年比	既存店 前年比	既存店 前年比			
05	1月	3.8	3.5	4.3	1.9	2.4	3.6	1.3	▲1.3	0.7	▲2.6	1.3	▲2.0
	2月	2.2	▲2.2	3.8	▲0.6	▲2.7	▲2.2	▲4.2	▲6.7	▲7.2	▲6.4	▲1.9	▲3.0
	3月	0.7	▲3.6	0.9	▲5.1	0.3	▲0.5	▲2.5	▲4.5	▲3.2	▲5.5	1.9	▲1.8
	4月	3.1	▲4.9	2.9	5.8	3.8	2.3	▲0.6	▲2.4	▲0.5	▲3.6	2.3	▲1.2
	5月	3.1	▲2.1	3.2	▲2.0	2.9	▲1.0	▲0.7	▲3.1	▲1.4	▲4.2	1.3	▲2.1
	6月	1.9	1.1	1.6	1.2	3.0	0.0	▲0.1	▲1.9	0.7	▲3.6	2.2	▲1.6
	7月	0.3	0.6	0.2	1.2	0.6	▲1.4	▲0.4	▲1.7	0.6	▲3.4	▲1.1	▲5.2
	8月	4.7	1.3	5.7	1.6	1.6	0.7	▲1.3	▲2.9	▲1.1	▲4.0	2.0	▲1.6
	9月	1.5	▲2.7	1.8	▲3.4	0.2	▲0.6	▲1.0	▲2.8	▲0.2	▲4.5	3.5	▲0.6
	10月	2.2	2.6	3.0	3.4	▲0.4	▲0.3	▲1.9	▲3.4	▲0.4	▲5.4	0.5	▲2.5
	11月	4.2	1.6	5.3	2.0	0.6	0.4	1.8	0.8	3.1	▲1.0	▲0.5	▲3.3
	12月	4.4	0.3	5.4	0.5	1.3	0.4	0.7	0.6	0.9	0.3	0.1	▲2.7
06	1月	5.3	4.0	7.4	3.1	▲0.4	2.4	▲2.3	▲2.8	▲0.9	▲4.1	0.3	▲2.7
	2月	5.5	▲2.7	6.9	▲2.0	1.1	▲1.4	▲1.6	▲1.9	0.3	▲3.3	1.2	▲1.9
	3月	3.3	▲5.1	3.9	▲6.8	1.0	▲0.3	0.1	▲0.3	1.8	▲1.8	0.7	▲2.0
	4月	4.1	5.6	5.6	7.4	▲0.8	▲0.1	▲0.5	▲0.9	▲0.4	▲1.3	▲1.8	▲4.6
	5月	6.8	0.0	9.1	0.3	0.1	0.6	▲0.9	▲1.6	▲1.2	▲1.9	0.2	▲2.5
	6月	5.1	0.0	6.5	▲0.3	0.4	0.1	0.6	▲0.7	▲1.9	0.1	3.2	1.1

（出所） 経済産業省「商業販売統計」

○ 天候不順が下押し

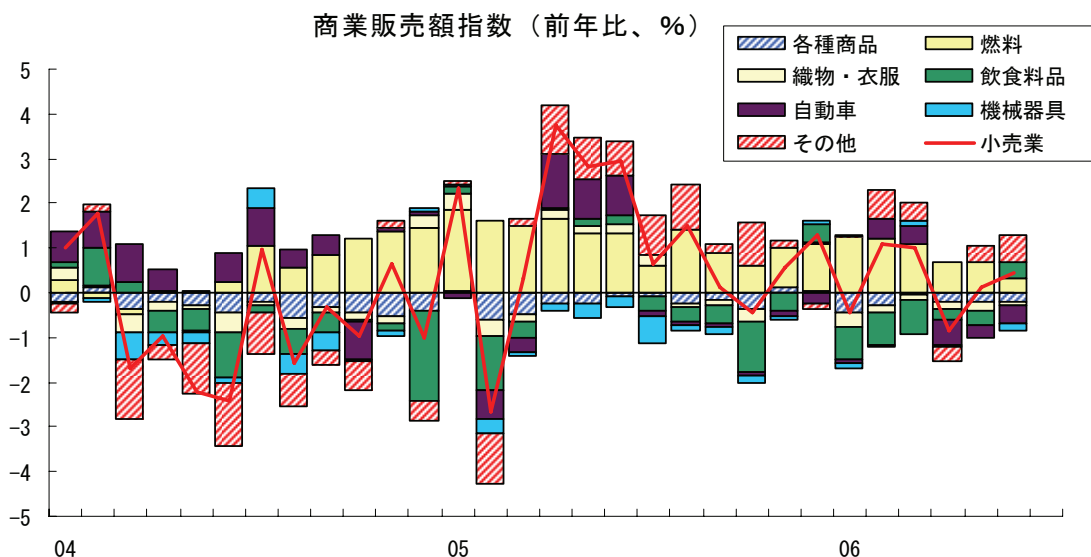
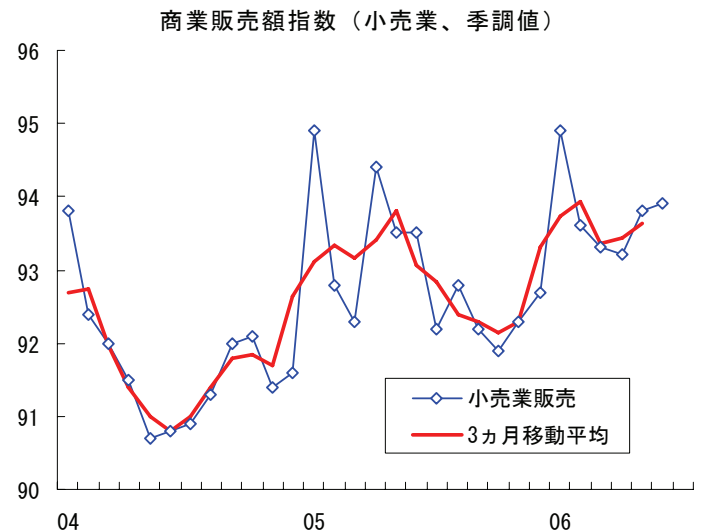
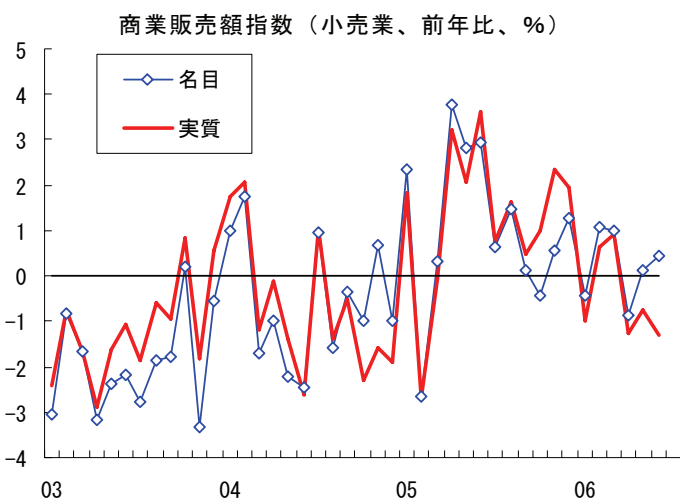
本日、経済産業省より2006年6月の商業販売統計が公表された。小売業販売額は前年比+0.4%と、ほぼコンセンサス（+0.1%、レンジ▲0.9%～+1.2%）通りの結果となった。季節調整値では前月比+0.1%と小幅ながら2ヵ月連続の上昇である。また、大型小売店販売額は前年比▲0.7%（既存店）、季調済み前月比（全店）では+1.0%となっている。なお、業態別には百貨店販売額は前年比▲1.9%と3ヵ月連続のマイナスとなったが、スーパーは同+0.1%と6ヵ月ぶりにプラスとなっている。なお、スーパーのプラス転化については、生鮮食料品価格上昇の影響が大きいとみられ、本質的な改善とは言い難い面もある。

6月は季調値でみて前月から若干改善してはいるが、水準は低く、4-6月期でみれば季調済み前期比▲0.3%と小幅減少している。また6月の値も、物価の影響を除くためにCPIの財（電気代・ガス代除く）で実質化すれば前年比▲1.3%と、前月（▲0.7%）からマイナス幅が拡大する。4-6月期の消費は天候不順の影響を受けて不冴えだったということが改めて確認できる結果である。

○ 家計調査は実態よりも下振れの可能性

もっとも、一つ注意しておくべき点がある。足元の商業販売統計は確かにやや低調ではあるが、家計調査と比較すれば悪くはない。6月の家計調査（勤労者世帯）をみると、世帯主収入が前年比▲4.1%、うち臨時収入・賞与が同▲10.2%となっており、夏のボーナスが増加したと思われることなどから考えれば、かなり違和感のある内容である。サンプル数の少なさに由来する統計の振れの問題を常に抱えている家計調査の結果が、実態よりも下振れている可能性は否定できない。4-6月期の個人消費がやや低調だったことは事実であるが、実際には家計調査から受ける印象ほどには消費は悪くないと考えられる。

雇用・所得環境も順調に回復しており、個人消費を取り巻く環境は良好な状態が続いている。天候不順等の悪影響が剥落すれば、個人消費も再び増加傾向に転じる可能性が高いと思われる。7月も天候不順の影響が残存する可能性が高いことや、生鮮食品価格の上昇による下押し等のリスク要因には注意が必要だが、基調としてみれば個人消費は今後も堅調に推移していくと予想している。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。